

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

(29)

石原昌家

1980年4月から9月にかけて、私は出身大学院の大阪市立大学へ半年研修に出向いた。その間、関西や関東で多くの聞き取り調査を行いさまざまな資料を目にする事ができた。そのなかで陸軍中野学校の校友会が78年3月にまとめた会員限定版の『陸軍中野学校』にもふれることになった。すでに71年には番町書房から嵐山清行の『陸軍中野学校』が出版されていた

た。それをもとに嶋袋記者は1980年6月18日付の琉球新報で「沖繩戦敗戦後に不還攻撃計画」という見出しで、6月23日の軍主力玉砕後、陸軍中野学校出身者を中心に米軍への強力な威力遊撃戦が計画されていたとする記事を掲載した。記事は「第3遊撃隊

沖繩の遊撃隊

ゲリラ兵

ここで「不還攻撃」を決

隊長の村上治夫中尉は、北飛行場(本部飛行場)に全員決死の不還総攻撃を遂行することとし(6月)25日に各部隊に準備を命じ、7月1日決行を予定した」と伝えていた。

秘密戦の基盤作り

国頭地区には、大本営陸軍部特務隊の北班が残留諜報機関として潜入していた。所持していた無線機で大本営発表を傍受していた。45年6月25日ごろ、第3遊撃隊の村上大隊長は北班の情報によつて第32軍主力の壊滅を知った。「村上大隊長は、軍主力が玉砕した今日、従来の遊撃戦の戦法は手強い。さらに強力な威力遊撃戦を展開すべきではないかと考え、七月一日を期して北飛行場に全員決死の総攻撃を遂行することを決心し、一五日各隊に攻撃準備を命じた(この攻撃を不還攻撃と称した)。(中野校友会『陸軍中野学校』646頁)

北部に少年護郷隊 「不還攻撃」計画を中止

北部に少年護郷隊

和野社長は懇意にしていた琉球新報東京支社の嶋袋記者にもその情報をも

行しようとした沖繩の遊撃隊について、番町書房と校友会発刊の『陸軍中野学校』に依拠して若干記しておく。

中野出身者による遊撃隊は、独立性と自主性が重んじられ、一般武力戦部隊とは任務、部隊員の特異性、戦闘方法が大きく異なる。沖繩戦での中野出身者は、遊撃部隊参加者、32軍司令部勤務者、離島工作要員(身分を秘匿し、残留諜報と遊撃戦の工作)、空挺部隊参

加者に大別される。1944年8月29日、32軍に命じられ、村上治夫中尉を大隊長とする第3遊撃隊総員約400人(又二二岳)と、岩波寿中尉を大隊長とする第4遊撃隊総員約400人(喜瀬武原・恩納岳)が編成された。第3、第4遊撃隊はそれぞれ第1から第4中隊で構成されていた。いずれも防諜上、第1、第2護郷隊と秘匿名を付した

こちよ歩いているから、敵もまさかこれがゲリラ兵隊とは知らない。戦闘の時はアメリカ兵も退屈しているの『おいおい、ちよと来い』と基地の中へ呼び込み、チヨコレートなどをくれてからかっている。一方その小さな情報班員は、キャラメルやチヨコレートをしゃぶりながら、基地内どこに弾薬庫があるかなどをみている。そしていい加減遊んでの帰りに

は、重要な建物のかげなどに時限式の爆弾をしかけて来る。夜になると、そいつがばかばかんと爆発しはじめて炎々と燃えあがる(297頁)。

た。かれは第3遊撃隊本部付きて、隊長の副官的役割を果たしていた。中野の精神は、主力部隊全滅後、遊撃戦を継続し、米軍の本土攻撃の基地をかく乱することにあるということで、村上大隊長はその意見を受け入れた。そして難民收容所に紛れ込んで秘密遊撃戦の基盤作りにあたることにした。地元出身隊員は一般住民と一緒に出身部落に帰し、町村吏員、米軍作業員となり、遊撃戦の準備を進めて行った。ところが、8月15日突如「終戦の詔勅を拜し」、部隊は解散した。関東で調査をしていた私は琉球新報の記事でコメントを求められ「この資料を読んだ晩は眠れなかった。すでに主力が壊滅し、敗けることがわかっていながら、本土の国体護持のために、ずるずると真相を知らせまいままに抵抗戦にまきこまれ、いたずらに犠牲を続けさせられようとしたわけだ。敗戦による犠牲を目的に当たりにしながら、さらに新たにむだな攻撃を仕かけようとした帝国主義日本の恐ろしきを感じた」と述べ

沖繩戦敗戦後に不還攻撃計画 実行寸前で中止



中野学校出身者編さんの文書で明らかに
スパイ捕獲作戦遂行も

沖繩戦敗戦後に「不還攻撃」が計画されていたことを伝える1980年6月18日付琉球新報

第4遊撃隊の第4中隊は「西表護郷隊」として、西表島へ行くことになった。各隊には秘密戦、遊撃戦教育修了者が配置された。遊撃隊員の人選は、「コ部」が作戦地域の「コ」町中隊が作戦地域の「コ」町村からの出身者になるよう留意し、護郷精神の高揚につとめることにした。そこで44年10月末から少年護郷隊員約700人を警備召集していった。さらに翌年3月には第3中学校生徒約1

た。これは第3遊撃隊本部付きて、隊長の副官的役割を果たしていた。中野の精神は、主力部隊全滅後、遊撃戦を継続し、米軍の本土攻撃の基地をかく乱することにあるということで、村上大隊長はその意見を受け入れた。そして難民收容所に紛れ込んで秘密遊撃戦の基盤作りにあたることにした。地元出身隊員は一般住民と一緒に出身部落に帰し、町村吏員、米軍作業員となり、遊撃戦の準備を進めて行った。ところが、8月15日突如「終戦の詔勅を拜し」、部隊は解散した。関東で調査をしていた私は琉球新報の記事でコメントを求められ「この資料を読んだ晩は眠れなかった。すでに主力が壊滅し、敗けることがわかっていながら、本土の国体護持のために、ずるずると真相を知らせまいままに抵抗戦にまきこまれ、いたずらに犠牲を続けさせられようとしたわけだ。敗戦による犠牲を目的に当たりにしながら、さらに新たにむだな攻撃を仕かけようとした帝国主義日本の恐ろしきを感じた」と述べ

(次回は29日掲載)